国際研究論叢　18（3）：113～127，2005

アウシュヴィッツの人間（6）

ヘルマン・ラングバイン
訳：柴　嵜　雅　子*

Menschen in Auschwitz

Hermann LANGBEIN
Übersetzt von Masako Shibasaki*

キーワード
アウシュヴィッツ、ホロコースト、ラングバイン

自信満々で丸々太った薬剤師、ヴィクトール・カペジウスは、常軌を逸していた。彼もまた命令の執行以上のことを犯した。カペジウスはジーベンビュルゲンの出身で、1907年生まれ。彼がフランクフルト裁判で弁明しなければならなかったとき、かつての学友で牧師になっていたカールハインツ・シューレリは、弁護側の証人として召喚に応じ、「カペジウスの実家はとても信心深く、社会奉仕にとても尽くして善行をたくさん行なった」と饒舌に語った。ルーマニア出身の民族上のドイツ人がたいていそうしたように、カペジウスも1943年にＳＳに入隊した。その前はバイアー工場のルーマニア支配人をしていたので、ＳＳでは薬剤師に任命された。

フランクフルト裁判で弁護に立った証人たちは、カペジウスは確信的なナチではないと断言し、その証拠として彼の妻が半ユダヤ人であることを挙げたが、それは信じてよいだろう。遠く離れたジーベンビュルゲンでは、カペジウスはこうした「汚点」をＳＳ上層部から隠すことができたようだ。

アウシュヴィッツのＳＳ薬局長が亡くなったため、1944年初頭、カペジウスがその後継者となった。ＳＳ医務長の地位についたＳＳ指導者は皆そうだが、彼もまたハンガリーからの移送が来たとき、降車場で選別をする役割を定期的に割り当てられた。その際、彼は前代未聞の状況に立たされた。バイアー工場の支配人だったので、当時ハンガリーに併合されていたジーベンビュルゲンの医者や薬剤師は顔見知りで、その多くはユダヤ人だったのである。途方に暮れた彼らは、降車場でカペジウスの姿を見つけると、助けてほしいと嘆願した。カペジウスはハンガリー語でこれに応じた。夫人のマリアンナ・アーダム・カペジウスの記憶によると、「主人はいつになくくつろいだ様子で、とても愛想がよく陽気でした。『お疲れの方は別の方向へ進んでください。保護収容所へ行けますから。そこは何もかもきれいで快適ですし、アウシュヴィッツの最初の選別で離れ離れになってしまっ

＊しばさき　まさこ：大阪国際大学人間科学部教授〈2004.11.29受理〉

た家族とも会えますよ』と主人が言いましたので、たくさんの人が自分からそちらの方へ五列で進んで行きました」。親切な助言によって、カペジウスは選別を容易にした。犠牲者たちは死へと定められたグループへ、自発的に入っていったのである。

しかしカペジウスにとって降車場で一番重要なことは、選別ではなかった。ＳＳ薬局で働いていたタデウス・セヴチクは、カペジウスが降車場から帰ってきたときの様子について、こう述べている。「ある昼のこと、傷病者輸送車に乗ってカペジウスがやって来て、車からトランクを運び出せと命じました。革製のトランクの大きさは色々で、だいたい15個です。私はその中身の仕分けをするよう、指示されたのですが、彼は私の横に残っていました。トランクの中身は、服、シャツ、化粧品、お金、安全かみそりなどです。カペジウスは良質の服はみんな上等のトランクに入れました。お金も全部です。他のものはすべて屋根裏に持って行って、仕分けが行なわれました。カペジウスは外貨はすぐに自分の金庫にしまいましたが、ドイツの貨幣はトランクに入れたままでした。装身具や時計類も同様にトランクとポケットに突っ込んでいました」。この仕分けの際、カペジウスがケチ臭くなかったことも、セヴチクは認めている。「食料品は囚人に分けてくれました」とのことである。

屋根裏にはＳＳ薬局の倉庫があった。ヴィルヘルム・プローコプは、そこで目にしなければならなかったことを、次のように説明している。「一度カペジウスが屋根裏を視察したことがあって、私が案内をしなければなりませんでした。薬品の入ったトランクはすべて見せたのですが、帰る途中、彼は右側にある数々のトランクに気づきました。中には入れ歯や歯などが詰まっていて、まだ骨片や歯肉が付着しているものも少なくありません。どれも腐敗し始めていて、ひどい悪臭を放っています。カペジウスが『これは何だ？』と尋ねたので、私は『これらのトランクは歯科の所有物です』と答えました。彼はトランクに近づいてしゃがみこみ、臭いかばんの中を両手で引っ掻き回したかと思うと、入れ歯を一つ取り出してかざしました。まるで値踏みをしているかのようでした」。プローコプは、トランクの中身が日に日に減っていくのに気づいたが、カペジウスから、万一このことをしゃべったら殺すぞ、と脅されていたという。

収容所に長くいたポーランド人のヤン・シコルスキは、ＳＳ薬局の主任であったため、収容所に集まる財貨にもっとも都合よく接することができた。シコルスキはフランクフルト裁判で判事に次のように語った。「カペジウスは囚人にやさしくはありませんでしたが、他の連中のような悪党でもありませんでした。収容所に薬品を供給することに、彼は何の関心も持っていませんでした。ただ、当時はもう戦争が終わりに近づいていたので、かなりの囚人に親切を振りまいて、保身を計っていました。カペジウスは私にこう言ったことがあります。『今は私が将校で、お前たちが囚人だが、二ヶ月もすれば逆になっているかもしれない』」。

カペジウスが自分の望みを満たすためにどこまで手を尽くしたかを、シコルスキは私に話してくれた。カペジウスがダイヤのブローチを探していたことがあって、「手に入れてくれたら、火酒を12本やる」とシコルスキに約束した。シコルスキは期限を守り、望みのブローチを渡したので、カペジウスは火酒を調達してくれた。12本もの瓶を収容所にこっ

そり持ち込むのは危険なので、シコルスキはカペジウス自らが酒を収容所まで持ってくるよう、話をつけた。カペジウスはＳＳ少佐だったので、もちろん収容所に入るのに何のチェックも受けない。実際、彼は収容所まで12本の火酒を運び、シコルスキに手渡したのである。

カペジウスは世渡りがうまかった。彼の部下、クルト・ユーラゼクは急使としてよくオラーニエンブルクへ派遣されたが、その際にカペジウスの上司への「ちょっとした贈り物」を届けさせられていた。私としては、ＳＳ薬局長だったカペジウスに、親切心のかけらも認めることはできず、横柄さしか感じなかった。もっとも、私は何かを調達して彼の役に立つこともできなかったのである。

フランクフルトの判事たちは、慎重に言葉を選んで判決理由を書き、カペジウスの「私腹の肥やし方は、そのような所業が良心的に控えられていたとは必ずしも言えないアウシュヴィッツにおいてさえ、目に余ると言わざるを得ない」とまとめている。

カペジウスと同郷のフリッツ・クラインも、殺戮に際して自発性を発揮したタイプの医師である。ただし彼は、これまであげた医師とは違っている。年齢からして異なる。クラインは1888年生まれで、55歳になるまでジーベンビュルゲンの小村で開業医をしていた。他の医師はＳＳの制服を着ることによって、自分が偉くなり周囲に認められたと感じているようだったが、クラインに制服は似合わなかった。

彼は筋金入りの反ユダヤ主義者だった。エラ・リンゲンスは収容所でただ一人のドイツ人囚人医だったので、他の人以上の話をクラインから聞きだすことができた。彼女はクラインと交わしたある会話を覚えていた。あらゆる人間の生命を守るという医師の義務を彼女が指摘したところ、クラインは比喩を用いて答えたのである。「人間の命に対する畏敬の念を持っているからこそ、私は炎症を起こした盲腸を患者から取り除く。ヨーロッパのユダヤ人は、炎症を起こした盲腸なんだ」。マンカ・シュヴァルボヴァの記憶によると、クラインは女性収容所病棟で看護に当っているユダヤ人に代えて、アーリア人を入れるよう命じた。ユダヤ人では女医だけが、残ることを許された。死へと選別されたユダヤ系のドイツ人女性がクラインに命乞いをしたとき、彼は「死んでもおかしくない年ではないか。他の連中ができることなのだから、お前もできるはずだ」と答えたという。これを伝えてくれたのは、ユーディト・シュテルンベルク＝ニューマンである。

虐殺のときのクラインの振舞は、他の人が通常とる行動と似ていなかった。基幹収容所でのことだが、監督に当っているＳＳ隊長がガス室へ連れて行くため、またもや虚弱者をトラックに乗せようとしたとき、看護士のヤヌシュ・ムリナルスキはクラインが怒鳴りつけているのを耳にした。「なんで車にそんなに詰め込むんだ！　彼らは人間で、缶詰のイワシじゃないんだぞ！」。もちろん、トラックの行き先については、クラインは何の疑念も抱いていなかった。

クラインが女性収容所の病棟で回診をしたとき、ある囚人医が、これこれの患者はなお二、三日間の静養が必要ですと注意を促した。それを受けてクラインは、それらの回復期の患者に五日から一週間の安静を丁重に指示した。二日後、囚人病棟の前に何台ものトラ

ックが来て、五日間以上病棟にいた病人は全員、乗り込まねばならなかった。トラックはよく知られた道を通って、病人たちをガス室へ連れて行った。この事件が起きたのは、すでに終戦の兆しがはっきりしていた1944年10月である。

基幹収容所の囚人病棟で書記をしていたイーゴーア・ビストリクは、ハンガリーから来たユダヤ人男性を選別リストから削除するよう、クラインに頼んだことがあるが、断られてしまった。同じくクラインという名前のその男性は、ハンガリーの国会議員だったが、ガス室へ向かわねばならなかった。ビストリクによると、「その後、クラインは私の顔をまともに見なくなりました」。

ビストリクと同じ囚人病棟で働いていたエルヴィン・ヴァーレンティーンが1945年5月15日、まだ記憶も新しいうちに行なった供述によると、クラインは14歳のユダヤ人少年を、何も悪いところがないにもかかわらず、死へと選別した。この少年は首筋に化膿性の炎症を起こしていたが、ヴァーレンティーンが切開したおかげで、再び働けるようになっていたのである。少年が「僕は元気だし、もっと生きたいんだ」と泣き叫ぶと、クラインはニコニコしながら少年をやさしくさすり、「君は煙突に行くんじゃない、もっといい病棟に移るんだ」と説明したという。

ただし、クラインの別の側面を知っているユダヤ人も幾人かいる。オルガ・レンギエルはクラインについて、声を荒げたことのない唯一のＳＳ隊員だと語っている。収容所指導者が315人の女性を死へと選別したことがあった。彼女たちはバラックに閉じ込められ、ＳＳ医が最終的にガス室へ送る者を決めるまで、待たされていた。医学生だったレンギエルは収容所で看護士をしていたため、このバラックまでクラインに同行しなければならなかった。選別された女性の中には、まだ働ける人も混じっていることを、彼女は何とかしてクラインに分かってもらおうとした。彼は何も答えなかったが、バラックに到着し、哀れな女性たちをじろじろ見ると、「お前たちは元気なのに、仮病を使っているだけだ」と言って、何人かを引っ張り出した。そのおかげで、トラックに載せられる犠牲者の数は、31人減ったのである。

レンギエルは、跪拝の罰を受けかけたことがある。しかしクラインが適当に口実を付けて彼女を呼び出してくれたおかげで、罰を免れた。また別の折に、あるブロックの囚人が何時間も雨の中で整列を命じられている、とレンギエルが伝えると、クラインは何の返事もしなかったが、すぐその場へ直行し、立っている囚人たちにブロックの中へ入れと命じた。このような経験をレンギエルができたのは、彼女とクラインが同じジーベンビュルゲンのある地方の出身で、互いにハンガリー語で話せたからかもしれない。クラインが選別を行い、何百人もガス室送りにした場面を、レンギエルは一度ならず目にしている。彼女はクラインのことを表わすのに、「模範的殺し屋」という言葉を考え出した。

エドゥアード・ドゥ・ヴィントは、同じく収容所にいた妻の願いを聞いたクラインが、懲罰部隊に配属される囚人リストから自分の名前を削除してくれたことを忘れていない。とはいえ、その直前にクラインは、病気のユダヤ人を殴るのを拒否したという理由で、ブロック古参だったドゥ・ヴィントに体罰を加えただけでなく、ブロック古参の役からも外していた。ドゥ・ヴィント夫妻はオランダ出身で、クラインと同郷のよしみはなかったか

らである。

テレージエンシュタットの家族収容所で、子どもブロックにいたイエフーダ・ベーコンの証言によると、クラインはそこに収容されていた子どもたちに関心を寄せ、時には一緒に遊ぶほどだった。子どもたちのためにサッカーボールを持ってきて、「まるで、おじさんのように」振舞っていたという。

私はかつてクラインに、彼が創作した脚本を、空き時間にカーボンコピーを取ってタイプするよう頼まれたことがある。この脚本の詳細は覚えていないが、クラインの故郷を舞台にした「血と大地のドラマ」だったことは記憶に残っている。全くさえない筆致で、民族と神秘的に結ばれた高貴な人間としてドイツ人が描かれていた。基幹収容所で囚人用事務室の室長をしていたパヴェル・ラインケは、クラインがひねり出した詩行に合った韻を見つけ出さなければならなかった。クラインは自作の詩の中で、ナチズムが彼の故郷にもたらした恩恵を褒め称えている。クラインがいつもヒトラーの肖像を携えていたのを、フェイキエルは見たという。

オルガ・レンギエルによれば、クラインは戦争の結末について幻想は全く抱いていなかった。ある時など女性収容所まで自転車に乗ってやって来て、ガソリン不足のために公用車を取られてしまったと散々こぼした末に、「戦争はもうじき終わるだろう」と語り、最後にこう告げた。「戦争が終われば、君にしても他の囚人にしても、私のために何もしなくなることは、よく分かっているんだ」。

御多分に漏れず、クラインも酒を飲むのが好きだった。調達に都合のいい立場にいた同郷のカペジウスは、クラインにアルコール類をふんだんに提供したと言っている。戦争の末期、クラインはベルゲン・ベルゼン収容所に異動となり、そこで英軍に逮捕され、他の者たちと一緒にリューネブルクの英軍法廷に立たされた。殺戮方法についての意見を求められたクラインは、「もちろんガス殺をよいとは思いませんでしたが、反抗もしませんでした。そんなことをしても無駄でしたから。軍に入れば反抗はできないのです」とだけ答えた。また「選別に参加するのは、決して快いことではありませんでした」とも断言している。

ひたすら命令通りに実行し、それ以上の悪行もしないが、囚人を助けることもなかった医者たちは、つかみ所がない。彼らについて語れることはきわめて少ないが、たとえば次のような医師がこのグループに属すると思われる。

まず、ブルーノ・ヴェーバーが挙げられる。彼は1915年生まれで、アウシュヴィッツにおける武装ＳＳの衛生研究所所長だった。この研究所で働いていた囚人のマーク・クラインはヴェーバーについて、「医師として、しっかりした生物学の知識を持っていたようでした。専門は微生物学です。非の打ち所なく洗練され、高慢で冷ややかな皮肉屋だった彼は、囚人に近寄ることはありませんでしたが、いつも礼儀正しく振舞っていました」と語っている。部下だったＳＳ医のハンス・ミュンヒは、ヴェーバーは他のＳＳ指導者からも距離を置いていた、と証言している。ミュンヒの記憶によると、ヴェーバーは戦前、奨学金をもらってアメリカに留学していたという。

私の印象では、ヴェーバーはアウシュヴィッツに嫌悪感を抱いていたが、それでもなお

前線での勤務より絶滅収容所に留まる方を選んだ。彼は絶えず自分の研究所の重要性を強調しようと心がけ、研究所の拡大に全力を注いだ。研究所で専門家として働いていた囚人は、他の大半の作業班にいる者よりもはるかに恵まれていたため、力の及ぶ限りヴェーバーを後押しした。

1912年生まれのハンス・ヴィルヘルム・ケーニヒを、三つのグループのどれかに入れるのはむずかしいが、今、論じているグループがまだ一番近いだろう。

ケーニヒは一方では、囚人を犠牲にして学ぼうとした。サムエル・シュタインベルクが基幹収容所で見たことだが、彼の診断では単純な切開で十分な蜂巣炎の患者に対して、ケーニヒは切断手術を行なった。ケーニヒは当時、切断の様々な方法を習得しようとしていたのである。切断手術を受けた患者たちはその後、労働不能を理由にガス室へ送られた。

ケーニヒは収容所で勤務している期間を利用して、さらなる医術の習得に努め、その際、ユダヤ人の囚人医から学ぶことも辞さなかった、とエラ・リンゲンスも書いている。彼は病状が興味を惹いた患者は注意深く看護し、その状態を毎日尋ねた。

こうした患者にしても、病気の経過に対する興味が失せると、ケーニヒはガス室へ送った。彼は知的で勤勉で、「細かな点では非人間的ではなかった」とリンゲンスは言っている。女性収容所で選別を行なう破目に陥るたびに、彼は酔っ払っていたのである。

ジョルジュ・ウェラーは、モノヴィッツの病棟の実験室で働いていた彼のような囚人を、ケーニヒがいつも丁重に扱ったことを強調している。ウェラーは「ユダヤ人の星」を付けていたにもかかわらず、ケーニヒは二人だけのときはウェラーを「教授」と呼んでいた。また嘘がばれて囚人たちの身が危うくなったとき、ケーニヒが彼らをかばったこともある。

リンゲンスの記憶によるとケーニヒは、若いユダヤ人の医長のエナ・ヴァイスを非常に尊敬していた。彼はリンゲンスに対して、「イギリス風の生活様式も悪くないかもしれない」と語ったが、すぐまた並外れて狂信的に振舞い始めたという。フリッツ・ベルルの話では、ケーニヒはプラハ大学でともに学んだユダヤ人の歯科医を、ビルケナウの解体工場で偶然に見つけた。ケーニヒはその旧友に食べ物を持ってきた上、待遇のもっとよい作業班に入れるよう手を回したのである。

マンカ・シュヴァルボヴァは、ケーニヒから次のように言われたことがある。「裏でこそこそするのは止めましょう。あなたが発疹チフスと猩紅熱の患者を隠していることは分かっています。そのまま治療を続けてもかまいませんが、私にも患者を見せ、伝染病の代わりに付けた病名を教えてください」。こんな奇妙な申し出をするのは、階級が上のメンゲレに対して不安を抱いているからだ、とケーニヒは明かした。シュヴァルボヴァがこの提案に従うと、ケーニヒは偽の病名が付いた患者の不利になるようなことは、決してしなかった。これは1944年のことである。

医師のヴェルナー・ローデについても、様々なことが分かっている。彼は1904年、マールブルクに生まれた。囚人を使って人体実験をするという誘惑に勝てず、必ずしも致死的ではない液体を４人の囚人に飲ませた。これはアウシュヴィッツの基準からすれば、取るに足りない出来事ではあるが、彼がこの殺人を自発的に行なったことは明らかである。そ

の一方で、最初からアウシュヴィッツにいてすべてのＳＳ医と接したことがあり、彼らを注意深く観察していたエドヴァルト・ピスは、ローデをもっとも人間的な医師の一人と呼んでいる。ただし、それは限定付きで、他のどの病棟でも同じ印象を与えていたかどうかは分からない、とピスは述べている。エルヴィン・ヴァーレンティーンの報告では、ローデは実務的な考えに基づき、死へと選別された人々を何度か引き戻したという。

収容所古参のヴラディスラフ・フェイキエルによると、ローデは「典型的なドイツの学生組合員」であり、「ほろ酔い」で病棟に来ることもよくあった。そんなときの彼は「情にもろい」ので、訴えをよく聞いてくれたという。読みもせずにどんな書類にでも署名し、私利を離れ、だれよりも「礼儀正しく振舞った」のである。フェイキエルのローデ評は、「私たちは彼の援助のおかげで、様々な苦境に陥っていた仲間を助けることができた」という言葉で締めくくられている。タデウス・パチュラも、ローデが死へと定めた人数は、衛生兵のクレールの提案よりも少ないことが何度かあったことを認めている。ローデが「君たちが望むなら救うことはできるが、ユダヤ人だけは駄目だ」と言ったことを、パチュラは今も覚えている。

ローデに関するもっとも肯定的な証言は、女性の口から出ている。彼は明らかに、女性の囚人の願いにきわめて理解があった。イザベラ・ソスノフスカは、ローデは「選別の際、人間らしい感情を見せ、落ち着きを失って深酒をしていました」と述べている。リリー・マイトナーとマルギット・タイテルバウムによると、ローデは女性収容所の衛生状態の向上に努め、受取人がすでに亡くなっている小包を他の囚人に分配するよう命じた。そのような小包は、以前ならＳＳが自分たちの物にしていたのである。

ローデのことを一番よく知っていたのは、エラ・リンゲンスである。二人は元はマールブルク大学でともに医学を学んでいた。リンゲンスに言わせれば、ローデは無定見で、なぜＳＳ隊員になったのかよく分からないタイプである。彼はリンゲンスに向かって、「戦争が終われば君と僕は一緒にワイングラスを傾けているだろう」と語ったこともある。リンゲンスの記憶によると、ローデは女性収容所の諸条件を改善しようと努力していたという。けれども彼にしても結局は、発疹チフスの患者をガス室に送らせた。それから後は伝染病患者が出ても、彼には報告しなくなった。ローデはそのことに感謝しているようだった。もしまた病気が流行すれば、アウシュヴィッツではごく普通の伝染病対策をとらざるを得なくなることを、彼は明らかに恐れていたのである。

ローデは囚人に何かを調達してもらうとき、丁寧語を使った。彼がポーランド人の囚人に、妻に贈る素敵なプレゼントを見つくろうよう頼んだことがあった。豚革の旅行用小物入れを持ってきた囚人に、ローデは「妻はあのプレゼントとても気に入ってね。礼を言うように頼まれたよ」と語った。囚人たちが彼を贈り物で買収するよう力を尽くしたことは、言うまでもない。その努力は十分報われたのである。

ローデはアウシュヴィッツからナッツヴァイラーへ転勤になった。彼がナッツヴァイラーでの行為ゆえにフランスの軍事裁判所で弁明を求められたとき、マールブルクで彼を教えたフェルゼ教授は、ローデは「本当の意味で『よい』学生」であり、「ナチ党のために積極的な活動をしたり、あるいは宣伝活動をしたりしている彼を見たことは、一度もあり

ません」と述べた。これ以上に重要だったのは、ナッツヴァイラーで囚人だったパウルゼン教授の証言で、彼は法廷でローデについて肯定的な陳述を行なったのである。

殺人命令にいやいや従っているＳＳ医も少なくなかった。程度の差はあれ、こうした医者の助力を得て、囚人をたびたび救うことができたのである。

この三番目の、囚人にとってもっとも大切なタイプに入るある医師は、他の誰よりも早くナチ党員になっていた。それは、歯医者のヴィリ・フランクである。彼は1922年、19歳でレーゲンスブルクにおけるナチ党の創立メンバーとなり、ミュンヘンのフェルトヘルンハレへの行進に参加し、「古参戦士」を示す先の尖った階級章を付けることを許されていた。アウシュヴィッツの歯科でフランクの下で働いていた囚人たちは、彼に有利な証言を行なっている。

フランクの雑用係をしていたドイツ生まれのユダヤ人、メネ・クラッツは、「彼は私に肩入れしてくれました。ちょっと特別待遇のある地位を保てたのです」と証言している。フェニー・ヘルマンはフランクのおかげで、女性収容所の囚人用歯科で働くことができた。彼女は「歯科にいたすべての人に、フランクはとても親切でした。助けることができる所では、いつも助けてくれたんです」と語っている。ヘルマンもユダヤ人だったが、それはフランクが助けの手を差しのべる妨げにはならなかった。焼却場で金歯を溶かす仕事をやらされていたユダヤ人の歯科技工士たちに、彼はマーガリンや白パンを持って行った。ただし、虐殺の秘密に通じていたこれらの歯科技工士は、結局は殺されることになっており、フランクはそれを止めはしなかった。彼が囚人に向かって冷酷な言葉や激した言葉を吐いているのは、私自身も聞いたことがない。

フランクフルトの法廷で、被告の最終弁論としてフランクは次のように言うことができた。「私がアウシュヴィッツでどのように振舞ったかは、そこで私と関わりのあった元囚人の方々が証人として語ってくれました。彼らの誰一人として、私に不利なことは言いませんでした。それどころか誰もが、私が彼らを人間的に扱ったと証言してくれました。私を命の恩人と呼ぶ人も、何人かいました」。大量殺戮についてフランクは、「当時のことを、私はおぞましいと感じていたとしか言えません」と判事に語った。にもかかわらず、フランクは順番が来れば抵抗もせず、降車場で選別を行なった。それゆえフランクフルト裁判では、彼も有罪とされたのである。

フランクフルト裁判所の被告席でフランクの横に座っていたのは、フランツ・ルーカスである。元囚人医たちは、彼に有利な証言をした。たとえばヴラディスラフ・フェイキエルは、「ルーカスは患者に対していつも礼儀正しく、また私たちにも親切な態度をとってくれました」と語った。アーロン・ベイリンは、以下の証言が真実であることを誓った。「ルーカスは一度、プラハ出身で囚人医のエプシュタインとかなり長い間、ジプシー収容所で語り合っていました。そんなことは滅多にありません。二人の話を私は聞いてはいませんでしたが、後でエプシュタインが私たちに、『みんな、あれはまともな人だよ』と教えてくれました。ルーカスは後にビルケナウの病棟で、ティロの代理人をしていましたが、その期間中、そこでは選別が中止されていました。彼はユダヤ人の医者とも一緒に手術をしていました。どうやら彼らから学びたかったようです。食べ物を持ってきてくれたこと

も、何度かありました」。この証言について、エプシュタインに確かめることはできなかった。裁判が始まったとき、彼はすでに亡くなっていたからである。タデウス・スニエシュコは、フランクフルト裁判でこう述べた。「ジプシー収容所の囚人医が全員、協議に参加するよう言われたことがあります。ルーカスがスピーチを行なったのですが、私たちは大変、驚きました。彼はこんなことを言ったのです。『仕事のために諸君と話し合いをしたい。現在、君たちが苦しい状況にあるのは分かっているが、それを変えることは私にはできない。私は、君たちが犯罪者などではないと確信している。医者として、君たちを同僚とみなし、病人と看護士を助けるために、できる限りのことをするつもりだ』。そして実際ルーカスは、できるだけのことをしてくれました」。タデウス・シマンスキもルーカスに有利な陳述を行なった。「ルーカス博士は人間でした。あの人がいたから、私はドイツ人に対する信頼を取り戻したのです」。

エーミール・パノヴェクは、ヒトラー暗殺の噂が届いた日に、ＳＳ看護室の階段の吹き抜けで偶然ルーカスに出会った。最初、人々は襲撃計画が成功したと信じていた。パノヴェクの証言によると、ルーカスは暗殺を歓迎し、まもなく囚人はみな家へ帰れるだろうと語ったという。

ルーカスが残虐行為を働いたと非難する者は、一人もいない。しかし、囚人の運命に対して無関心だったと語る者は、何人かいる。もっとも手厳しい告発を行なったのは、元ブロック指導者で共同被告人のシュテファン・バレツキである。バレツキはまず、ルーカスが他のＳＳ医と同様に選別を実施したと語った。ルーカスは大仰な言葉を重ねてこれを否認したが、結局はしぶしぶ認めた。バレツキはさらに、ルーカスにとって不都合なエピソードをありありと語った。それはテレージエンシュタットの家族収容所を「清算」したときのことで、バレツキとその仲間は、子どもたちが大人と一緒にガス室へ送られずに済むよう努力した。先述したように、収容所所長のシュヴァルツフーバーは、少年たちを救った。しかし、少女たちを女性収容所に移したくても、そこはシュヴァルツフーバーの管轄ではなかったため、「女の子は救えませんでした。みんな綺麗な長い髪をしていたのに。それで、私たちはルーカスのところへ行ったのです。でも、何もしてくれませんでした」とバレツキは述べた。ルーカスには少女たちを救うことができたのかと尋ねられると、バレツキは、「難なくできました。彼なら女の子たちを女性収容所に連れて行くことができたはずです」と答えた。

1937年に作成された履歴書で強調しているように、ルーカスはギムナジウムですでに国家社会主義的な立場を隠そうとしなかった。1933年６月、学生だった彼はＳＡに入ったが、また脱退する。その理由として、ミュンスターのＳＡ学生突撃隊員の多くが持っている精神は、理想からかけ離れていたからだと、ルーカスは言っている。その頃、彼はＳＳに入隊し、同時に教会から脱会した。ただし、精神的に教会と縁を切ったわけではなく、ＳＳに気に入られるためにそうしたと、後に彼は主張している。

判事に対するルーカスの陳述によると、アウシュヴィッツの大量殺戮に直面して魂の危機に陥った彼は、休暇の間に父親の学友だったベルニング司教に心中を打ち明けた。「司教は私にこうおっしゃいました。『非道徳的な命令に従う必要はないが、それが行き過ぎ

て、自分の命を危険に晒してもいけない。過酷な司法の犠牲になったり、それどころか正式の手続きを踏まずに消されたりしないためには、与えられた命令をこなすしかない』」。ルーカスはさらに「高位の法律学者からも、さしたる助言は得られませんでした」と付言している。地方裁判所の長官は彼に、「戦争が始まって5年目なのだから、いろいろなことが起きるものだ」と答えたそうだ。こうしたやり取りが本当にあったのか否かは、確かめることができなかった。

かなりの証拠からして、バレツキが法廷でいみじくも言ったように、ルーカスは「帰りの切符を買うのに間に合った」ようである。というのもルーカスに有利な証言の大半は、1944年か1945年の最初の数ヶ月に起きたことに関連しているからだ。その頃、彼はラーヴェンスブリュックで囚人を助けたのである。法廷での彼は、他のどの被告よりも頻繁に言い分を変えたが、こうした真意の見えにくい弁明からも、バレツキの言葉が的を射ていると思われる。ルーカスは最終弁論で、アウシュヴィッツのことは決して乗り越えられないと悲壮な調子で断言した後、「あの頃、どうすれば手を染めずに済んだのか、今でもまだ分かりません」と語った。

これまで何度も引用してきたハンス・ミュンヒ（1911年生まれ）は、手を染めずに済んだ。ただし、彼はアウシュヴィッツできわめて恵まれた状況に置かれていた。彼が働いていた衛生研究所は、オラーニエンブルクの指導的衛生学者、ヨーアヒム・ムルゴフスキ教授の直接の監督下にあったからである。この好条件を利用して選別の割り当てを逃れた方法を、彼は次のように説明した。「最初は直接、拒否したりしませんでした。アウシュヴィッツのように官僚化され軍隊じみたところでは、それは全く不可能に思えたからです。ですから、端的に『私にはできません』と言ったのです。まず、直接の上司（ヴェーバー博士）のところに行き、他の人の話を装って自分の窮状を訴えました。彼はもちろん私の真意を見抜いて、もう一つ上のランクの上司たちに、同じようなやり方で私の問題が耳に入るように尽力してくれました。そこでもやはり理解を得ることができました。次に、他のきわめて重要な仕事で私も手が一杯であることを証明すると、それから半年間は煩わされることなく、選別を免れることができたのです。その後、アウシュヴィッツに慣れてからは、別の抜け穴を見つけてやりくりしました」。

マルク・クラインはミュンヒについて、「囚人に対して比較的、親切だった。彼の他にそのような人がいなかったわけではないものの、こうしたことは珍しかった」と書いている。ヴィロ・ユルコヴィクは、「ミュンヒは、ＳＳの制服を着たドイツ人でも人間らしく振舞える証拠だ」と語っている。クラクフで行なわれた大がかりなアウシュヴィッツ裁判で、40人の被告のうち唯一ミュンヒだけが無罪となった。この判決理由として法廷が指摘したのは、彼が殺戮機構に巻き込まれていなかったということと、様々な証人の証言である。それによると、彼は囚人が家族と連絡をとるのを助け、囚人に薬を与え、二人の女性を懲罰部隊から解放し、さらに囚人に親切な態度をとったがために不愉快な目に遭ったという。

しかし、ミュンヒにしても、彼の上役のヴェーバーにしても、衛生研究所に定着したあ

る慣習には何の反対もしなかった。元々、研究所では培養基として牛肉が使われていたのだが、そのために支給されていた牛肉を、自分たちで食べてしまおうと考えた研究員がいた。黒壁で射殺が行なわれると、まだすっかり痩せこけていない死体を捜して肉片を取り、それを培養に用いる一方で、これまで通り要求していた牛肉は、鍋の中に入っていたのである。

戦後、バイエルンの小村で開業医をしていたミュンヒに、私はどうしてＳＳに入ったのかを尋ねたことがある。彼の話では、衛生問題を自分の専門として選び、ナチ学生のためにバイエルンの森の住民の生活条件に関する調査を始めたところ、この研究で賞を取り、その頃すでにＳＳに入っていたヴェーバーの目に留まった。ヴェーバーは、ミュンヒもＳＳに入るよう説得した。ミュンヒが選んだ専門分野では、ＳＳに入れば、さらに研究するための最高の条件が与えられるが、さもなければまず研究はできない、というわけである。かくしてナチ精神の教育を受けていなかったにもかかわらず、ミュンヒはＳＳ隊員となり、ヴェーバーがアウシュヴィッツに派遣されると、彼も同様にそこへ赴いたのである。

衛生研究所には、ハンス・デルモッテというエリート学校を出たばかりの若い医者が、短期間だが配属されていた。彼の家は産業界の重鎮で、その親族はナチのヒエラルヒーで高い地位についていた。

アウシュヴィッツに移ったＳＳ医はみなそうだが、デルモッテもまず実地で先輩に付いて回り、すべての業務を体験しなければならなかった。それゆえデルモッテは、数日のうちに降車場での選別にも立ち会うことになった。その後の経緯を、ミュンヒは次のように述べている。「再び戻って来たとき、彼はすっかり取り乱していた。実際、自分で車を運転できる状態ではなかったので、ＳＳ隊員が送ってくれたのである。デルモッテの部屋は私の隣で、バタバタ音を立てて彼が階段を下りていたので、私はてっきり選別には付き物の火酒を飲みすぎたのだと思っていた。彼は勢いよく入って来たが、何も話せなかった。翌朝になって初めて、酒ばかりのせいではないことに私は気づいた。翌朝になっても、まともに話をすることができなかったからである。すっかりショックを受けた様子で、外出用制服を着て、ビシッとした姿勢で所長のところまで行き、『あのような職務の遂行は拒否いたします。私にはできません』と告げた。後日デルモッテは、あのやり方は直截すぎて非常にまずかったと言っていたが、彼は正式に任務を拒否した上に、『前線に送ってください。さもなければ、私もガスで殺して下さい。とにかく私にはできません』と言ったのである」。

所長から医務長のところへ行くよう指示されたデルモッテは、そこでも同じことを繰り返した。その結果、デルモッテは当分の間、メンゲレに同行せよと命じられた。デルモッテがユダヤ人絶滅の必要性を理解するよう、メンゲレに説得させようというわけである。どのような論拠を持ち出して、メンゲレは説得に成功したのだろうか。ミュンヒの記憶によると、メンゲレはこの若い医者に、次のように指摘したという。「非常事態にあっては、医者は選別の責任を負わなければならない。軍医にしても、みな前線では選別を行なわざるを得ない。戦闘の後、急を要する負傷者を全員同時に治療することは不可能だからだ。そのため最初に誰を治療するか、決めねばならない。その結果、後に回された者は、もう

救えなくなる恐れもある。降車場では、まだ労働可能な者を選び出すだけだ。ユダヤ人の全滅は決定済みの事項なのだから、さしあたり収容所に入る者を決めることは、それほど重大ではない」。

若きデルモッテは結局はメンゲレに説得され、他のＳＳ医と同様、選別を実施した。デルモッテは嫌悪感を抱きながら選別を行なったが、人柄がすっかり変わってしまい、「本当に参っていました」とミュンヒは述べている。1944年の秋、選別がようやく中止されると、デルモッテは心が軽くなったように見えた。

アンドレ・レティヒの記憶によると、衛生研究所で働いていたブルシュタインという名の囚人が選別されたという話を聞くと、デルモッテはすぐに収容所へ行き、不可欠な専門家だからと言って、死へと定められたグループからブルシュタインを引き出した。

戦後、逮捕を覚悟しなければならなくなったとき、デルモッテは自殺した。

長期間アウシュヴィッツにいた医者で、戦争末期になる以前から、殺戮命令に対してはっきりとためらいを見せた医者が３人いる。ブルーノ・キットとホルスト・フィッシャー、そして逡巡が一番明瞭だった医務長のエードゥアルト・ヴィルツである。

このうち最年長のキットは、ハムで1906年に生まれた。実際以上に年上に見え、わざとらしいほど軍人離れしていた。狂信的なナチではないことを、彼は隠さなかった。私の印象では、キットは年下の大半の同僚より、優れた専門知識を備えていた。エドヴァルト・ピスはキットのことを、アウシュヴィッツで会ったもっとも知的なＳＳ医と見なしている。ルートヴィヒ・ヴェルルは1942年から43年にかけての冬、モノヴィッツでキットと知り合った。ヴェルルは囚人病棟の収容所古参、キットは収容所医だったが、キットは時には人の話を聞いてくれた、とヴェルルは証言している。彼の後を継いで収容所古参となったハインリヒ・シュースターも、キットは「私たちの提案を一部は受け入れてくれました」と語り、ソーニャ・フィッシュマンは端的に、「キットは怖くありませんでした」と述べている。

キットは上司のヴィルツに、自分が監督している囚人病棟で定期的に選別を行なわなければならないと窮状を訴え、収容所医を解任してほしいと頼んだ。ヴィルツは当時、軍医の役目つまり通常の医療行為も、キットにしばらく委託していたのである。ただし軍医にしても、降車場への割り当てを免除されてはいなかった。

キットも御多分に漏れず、ヒトラーが権力を掌握した年にＳＳに入隊した。何年もたってから、私が入隊理由をキット夫人に尋ねると、「面倒な夏期訓練から逃れるためです。彼はあの頃、学生だったので、ＳＡの訓練に参加しなければならなかったんです」と答えてくれた。もしキットがルーカスと同様にフランクフルト裁判の被告になっていたら、私の知る限りでは、おそらくルーカスの時より多くの弁護側証人が見つかったことだろう。しかしキットはアウシュヴィッツからノイエンガメ収容所に異動となり、そこでの犯罪ゆえに、イギリスの軍事法廷よって死刑判決を下されたのである。

私が観察したところによると、ホルスト・フィッシャーはキット以上に激しい内的葛藤を抱えていた。彼は戦後、東ドイツで安穏と開業医をしていたが、アウシュヴィッツの収

容所医として行なったことゆえに、1966年３月、裁判にかけられた。そのため彼の人となりについては、数々の証言が存在する。フィッシャーは1912年にドレスデンで生まれた。両親を早くに亡くしたため、親戚に育てられ、大学では医学を専攻した。1933年11月１日にＳＳに入隊した理由を、彼は法廷で次のように述べた。「二親ともいませんでしたので、私は学費免除を受けねばなりませんでした。この学費免除を認めてもらうためには、ナチ党の政治活動に積極的に参加したという証明が要りました。私がＳＳに入った理由はいくつかあります。第一に、仲間の多くがすでにＳＳに入隊していたからです。第二に、ＳＳの制服が、当時の私には魅力的で、とても印象的だったからです。その上、私は自分があまり男らしくなくて、女々しいように感じていたものですから、特に厳しい組織に入ることによって、その埋め合わせをしたかったのかもしれません」。

フィッシャーはアウシュヴィッツへ辿りついた経緯を、以下のように物語った。まず、病気のために彼は前線部隊から外された。私の記憶が正しければ、彼の健康診断書には「肺結核」と書かれていたと思う。ＳＳの保養所で知り合った全収容所の医長、エノ・ロリングに、外科の勉強を続けたいとフィッシャーは打ち明けた。ロリングが、「強制収容所に行けば容易に外科の専門知識を深めることができるから、そこへ配置転換してもらうといい」と提案すると、フィッシャーもそれに同意した。

こうして1942年11月、フィッシャーはアウシュヴィッツにやって来た。彼は初めて選別をやらされたとき、ひどいショックを受けていたので、一緒に医学教育を受けて以来、親しくしていたヴィルツは、フィッシャーがそのショックから立ち直るのを助けようとした。法廷でのフィッシャーの陳述によると、ヴィルツはこう語ったという。「僕たちは、いわば心の前線に立っているんだ。どれほど多くの若い兵士が毎日、毎時間、命を落としているかを考えなくちゃいけない。そうすれば、選別のことを乗り越えるのが簡単になるだろう」。フィッシャーはアウシュヴィッツでの勤務が嫌でたまらないことを、私に対して少しも隠さなかった。彼の話し振りはいつも穏やかだっただけでなく、ＳＳ看護室の囚人事務室で、私たちとも平気で話をした。おそらくヴィルツが、そんなことをしても全然かまわないと言っていたせいだろう。

病棟でフィッシャーの行動を見ることのできた囚人の証言によると、フィッシャーが談話をした相手は私たちだけではなかった。ロベルト・ヴァイツは、フィッシャーが「時には人間らしい心の動き」を示したと述べ、その点でケーニヒやエントレスとは異なり、好ましかったことを強調している。同様にモノヴィッツでのフィッシャーを知っているジークフリート・ハルプライヒも、そのことを認めている。モノヴィッツの病棟の収容所古参だったシュテファン・ブジアシェクの発言によれば、フィッシャーは「人間的配慮に基づいて行動し」、人々の願いに耳を傾け、ある時などブジアシェクに向かって、「どの道ずっと前からうんざりしているんだが、今さら引っ込むこともできない」と語ったという。ヴァイツだけでなくオスカー・ベルテンも証言しているように、フィッシャーは選別の際に犠牲者の数を減らした。このことは収容所古参のブジアシェクの人物描写のところで、すでに述べた通りである。

私はフィッシャーと交わした会話を報告書にまとめたことがある。彼の特長のみならず、外郭収容所の事情をも示したその報告書には、以下のように書かれている。

「時間があるかい、ラングバイン？」。ヴィルツの代理人、フィッシャーがドアのところに立っている。

「はい。全紙ですか、二分の一ですか、博士？」。

「全紙でカーボンコピーをとってくれ。いや、待ちたまえ。来てくれた方がいい。チーフの部屋で口述しよう」。

フィッシャーはどうやら、私と一緒に事務室にいたズビシェクとエーミールの前では、話したくないらしい。何か特別なことに違いない。彼はヴィルツのデスクに向かって座った。

「『医務長殿』と書いてくれ。だがコピーも何枚かすぐ取ってほしい。チーフとはもう話をしたんだが、チーフはこの通告を、添え状を付けてベルリンにも送るつもりだから」。

「要件は？」。「『ヤヴィショヴィッツ労働収容所における衛生状態について』でいい」。

フィッシャーには、すべての外郭収容所の収容所医の任務が与えられていた。他のほとんどの収容所では、この春は（この会話が行なわれたのは1944年の春である）死者数が減少しているのに、ヤヴィショヴィッツでは死者数が最近、急上昇していることを、私はフィッシャーに指摘したばかりだった。彼はどうやら、その理由を探ろうとしているらしい。この文書は、「グルーベ」を管理していたハイネに対する苦情だった。グルーベはヘルマン・ゲーリング工場に属していた。ハイネは労働時間の延長を要求し、昼の間に食事を配付すると時間を取りすぎるので、囚人の昼食は中止するよう求め、その上、満足に働けない囚人は絶えず収容所から遠ざけ――すなわちガスで殺し――、代わりに新人を入れてほしいと言ってきていた。

口述中、フィッシャーは次第に激しく怒り始めた。「我々ＳＳは、とてもひどいと言われ続けている。しかし、こうした連中のことは、知られていないんだ！　連中と来たら、引っ切りなしに急き立てるんだから。しかも、またもやこんな要求だ！」

私は当時、この機会を利用して、信頼できる看護士を病棟の収容所古参としてヤヴィショヴィッツへ送り込んだ。抵抗組織はその時から、この外郭収容所にも連絡が取れるようになったのである。

ヴィルツは、フィッシャーとは医学生時代からの知り合いであり、絶滅収容所における大量殺戮に対する立場も似ていたため、彼のことを仲間と思って信頼していたが、他の配下の医師たちには、距離を置いた形式的な振舞をしていた。ヴィルツが速やかに昇進させたので、フィッシャーは位階を昇りつめてヴィルツの代理人となった。1943年８月に書かれた妻宛ての手紙で、ヴィルツはフィッシャーの性格をうまく表現している。「彼は実にまっとうで好ましい奴だ。しかし文句が多すぎる。見てほしくないもの、見てはならない

もの、ときには見過ごした方がよいものまで、見すぎてしまう……ホルストはいつも一本木で誠実なタイプだが、そのために厄介なことが本人や私に多々起きてしまう」。

私が受けた印象では、フィッシャーには持つべき注意力が欠けていた。ヴィルツは断固たる態度を取るので、私はそれを尊重するようになったが、フィッシャーにはそんな断固とした所がなかった。フィッシャーは逃げ道が見つからないと諦め、心の中では抵抗しながらも、殺人機構における自分の役割を遂行したのである。ちなみに、彼は専門的な知識を深めたいと本当に願っていた。1966年２月22日、フィッシャーは「囚人医たちは抜群のエキスパートでしたので、私が医学の勉強を続けるために、医務長のヴィルツは彼らから学ぶよう勧めてくれました」という供述を行なったが、それは決して後から捏造した話ではない。

他の大多数の被告とは異なり、フィッシャーは法廷で否認や粉飾や「記憶にございません」といった戦術をとらず、はっきり陳述するつもりでいたので、東ベルリンで行なわれた彼に対する訴訟が、内容からして当然求められるような綿密さを欠いていたことは、残念である。ただ、他のＳＳ医が法廷で未解決のままにしていた疑問点のうち、少なくとも一つをフィッシャーの供述は明らかにしてくれた。それは、病棟での選別はどのような基準で実施されたかという点である。これについてフィッシャーは、こう語った。

「選別の明確な基準を作り上げるために、アウシュヴィッツで勤務するＳＳ医全員で、たびたび協議を行ないました。そうした協議の末に生まれた選別の前提となる指標は、主として飢餓浮腫、臀部の脂肪組織の完全な欠落（これを確かめるため、ＳＳ医は裸で整列した囚人たちに回れ右をさせました）、結核の疑い（医療機器不足のため、真性の結核と確定するのは困難でした。基幹収容所のレントゲン室で調べるのは、どうやら手間がかかりすぎるようでした）、事故による骨折、重度の化膿でした。このような場合には、選別は適当と思われました」。フィッシャーは、ＳＳ医たちの態度を率直に述べた。「こうした指標の囚人が殺されたことについては、私たちはほとんど話をしませんでした。私個人としましては、このことによって、アウシュヴィッツ収容所の目的が、ある意味で達成されたと考えていました」。